

## 小特集②

## 欧州における終戦70周年 —ドイツ、ロシア、そしてその狭間で—

5月8日、第二次世界大戦の終結（ドイツの無条件降伏）から70周年を迎え、欧州各国で記念式典が行われた。全体的に、50周年、60周年の式典と比べて規模等が控え目になる傾向にあり、要因としてドイツと周辺国の和解の進展が指摘された（日経 5/9）。一方、ウクライナ情勢をめぐる欧米とロシアの対立を受けて、5月9日にモスクワの赤の広場で開かれた対独戦勝記念式典に欧米首脳は出席せず、ロシアの愛国主義や中国との蜜月ぶりを誇示するものとなった。以下では、ドイツ・ロシアの終戦70周年の記念式典を中心に、国際政治経済や国内の社会情勢の只中で揺れ動く、第二次世界大戦の犠牲者の追悼について概観する。

### 1. ドイツ

終戦の日（ドイツでは「解放の日」と称される）に先立つ5月2日、メルケル首相は政府の公式ウェブサイトにおいて、ナチスによるユダヤ人虐殺などの歴史と向き合う決意を表明した。また、昨今、ユダヤ教関連施設などへの襲撃が欧州各地で相次いでいることを受け [→『ラー

ク便り』66号小特集⑥参照)、ドイツにあるユダヤ系の学校や幼稚園を警官が警備しなければならない状況について「恥」と指摘。学校や社会における教育の徹底を誓った(読売5/4ほか)。

ナチスの強制収容所解放を記念する式典も相次ぎ、それぞれに要人が参列した。4月11日には南東部ブーヘンヴァルト収容所をシュルツ欧州議会議長が訪問した。同議長は、2014年10月頃から反イスラム団体「ペギーダ」が急速に支持を集め[→『ラク便り』66号54頁参照]、4月4日にはシリアからの避難民用の住宅で放火とみられる火災が起きるといった社会情勢について[→ドイツ参照]、「克服したとわれわれが思ってきた人種差別主義、反ユダヤ主義、国粋主義、不寛容の悪魔が戻ってきた」と強い言葉で批判した(赤旗4/14)。4月26日には北部ベルゲン・ベルゼン収容所の解放記念日にガウク大統領が参列。5月3日には、メルケル首相が南部ダッハウの収容所を訪問し、1月の『シャルリ・エブド』襲撃事件や2014年5月に起きたベルギーのユダヤ博物館襲撃事件[→『ラク便り』63号53頁参照]などを例に挙げながら、「別の考えを持つ人、ドイツ人とは違って見える人」に対する寛容を訴えた(東京5/4ほか)。

また5月6日にはガウク大統領がシュトゥッケンロック捕虜収容所を訪問し、これまであまり注目されてこなかったソ連人捕虜の被害について「第二次世界大戦の重大な犯罪の1つ」と述べた(赤旗5/9)。ドイツでは5月20日、戦争捕虜となった旧ソ連兵士のうち、存命の約4千人に補償金を支払う方針が連立与党内で固まったと報じられた。ソ連兵捕虜の数は約530万人とされ、過酷な待遇などが原因で半数以上が捕虜収容所などで死亡したとみられている。下院予算委員会で圧倒的多数の賛成を得たことから実現は確実とみられ、1人当たり2,500ユーロ(33万7千円相当)が支払われる。このような対応について、ドイツは経済的なつながりの深いロシアとの関係を重視しており、ウクライナ危機をめぐりロシアと欧米の対立が深まる中、対露制裁に加わりつつ、関係の維持に腐心しているとの見方がある(東京5/21ほか)。

同様の配慮は、「解放の日」の式典でも見られた。5月8日、ベルリンの連邦議会(下院)で行われた式典で、ランメルト議長は「我々の思いは、多くの犠牲を払いナチスとの戦いを終わらせた西側諸国と旧ソ連兵にも向けられる」と、連合側で戦った赤軍兵士の貢献を評価する発言を行った。パリで行われた式典でもオランド仏大統領が、米英と並んで露の役割を「心に留めたい」と発言した(毎日5/9ほか)。

また、同式典及び5月2日のメルケル首相のメッセージにおいて、過去を直視することが「すべてのドイツ人」に求められると指摘されたのは特徴的と言える。これは、戦後ドイツに移住した人々にも戦争犯罪を語り継ぐ責任があるという意味であり、昨今、反イスラエル感情の強いアラブ系の移民が急増していることを踏まえた発言とみられる(日経5/9ほか)。戦争を経験していない世代への記憶の継承については比較的議論になるところだが、これを移民にどう敷衍するのかという問いは、グローバル化の進む現代社会における新たな課題と言えるだろう。

「国民の記憶」の不均質性については、その他の要因も指摘されている。独シンクタンクのベルテルスマン財団が1月に公表した調査では、「ユダヤ人迫害は過去のものにしたい」という回答が58%を占めた。同財団は、「過去を忘れてはならないという『記憶の文化』はエリート層を中心に広がり、草の根にはそれほど浸透していないとみるべき」と分析している(朝日6/18)。

## 2. ロシア

ソ連は対独戦で2千万人を超える甚大な死者を出した（非戦闘員含む）。「大祖国戦争」との呼称どおり、従軍した兵士は祖国防衛の英雄とされ、対独戦勝記念日の5月9日には元兵士に花束を贈呈する行事が各地で開催されるなど、祝祭の色合いが濃い（毎日5/10ほか）。例年、赤の広場では大規模な軍事パレードが行われ、戦車・戦闘機や大陸間弾道弾など最新鋭の兵器が披露される。2005年の戦勝60周年記念式典には、ブッシュ米大統領や小泉首相など50ヶ国以上の国や国際機関の代表が参列したが、70周年の今回は、ウクライナ問題をめぐる欧米との対立を背景に20ヶ国の参加に留まり、その中にも国家元首級の出席は見合わせた国があった（読売5/10ほか）。

このような状況下で、旧ソ連軍が中国の抗日戦争で果たした役割を再評価する動きが活発化した。戦勝記念日に先立つ5月5日、モスクワでは「ファシズムと日本の軍国主義への勝利でソ連と中国が果たした役割」というテーマのシンポジウムが開かれ、プーチン露大統領が祝辞を贈った。シンポジウムでは、ロシア極東研究所のチタレンコ所長が「第二次世界大戦は1939年のドイツによるポーランド侵攻で始まったのではなく、37年の日本軍による中国侵攻で始まった」などと述べた。6日に国営メディアが行った討論会では、歴史学者が「ノモンハン事件でソ連軍が日本軍を撃退した」ことを高く評価する発言を行った。8日に行われた中露首脳会談では、両国が「最大の戦争被害国」かつ「戦勝国」であることが確認された。「戦勝国外交」を2015年の外交テーマに掲げる中国と、ウクライナ問題で対露制裁を続ける欧米を牽制したいロシアの間で利害が一致した結果とみられる（毎日5/9ほか）。

5月9日にモスクワの赤の広場で開催された記念式典には、中国、インド、南アフリカ、キューバ、ベトナム、モンゴルなどの国家元首のほか、国連事務総長などが出席したが（読売5/10ほか）、欧州連合（EU）加盟国で唯一参加を表明していたギリシャは、予定していた大統領ではなく議会議長の参列に留めた。当時は「祖国」の一員だった旧ソ連構成国も、2014年のクリミア併合以降はウクライナが不参加となり、西欧志向が強いジョージア、バルト三国などは以前から参加していない（東京5/10ほか）。

ただし、ドイツのメルケル首相は式典を欠席しつつも翌10日にモスクワを訪問し、無名戦士の墓に花を手向けた。「ロシアと意見は大きく異なるが、ドイツの責任で亡くなった何百万もの人たちを追悼することは重要」とドイツの戦争責任を強調したが、経済的結びつきの強いロシアとの関係改善の糸口を残すための苦肉の策との評価もある（朝日5/11ほか）。独紙『ヴェルト』は、これを「バランスが取れた行動」と評価した（産経5/18）。フランスのファビウス外相も9日、式典には参加しなかったものの、その後クレムリンで行われたレセプションには出席するなど（朝日5/10）、含みを持たせた。

なお、9日の軍事パレードの後、史上初めて、モスクワの大通りを50万人の一般市民が戦死者や元兵士の遺影を掲げて赤の広場に向かって行進する追悼パレードが行われた。ただし、先頭に立った参加者が8車線の道路いっぱい大きさの赤い旧ソ連国旗を掲げ、参加者からは「ロシア万歳」「ロシアは前進する」とシュプレヒコールが上がるなど、追悼よりも愛国心の高揚に力点が置かれた内容であった。参加者の多くは、プーチンの支持基盤となる保守層との分析も見られる（東京5/11ほか）。プーチン大統領も対独戦で負傷した父親ウラジーミルさんの写真を手に行進に参加した（日経5/11ほか）。

### 3. 東欧

ウクライナでは、ロシアが戦勝記念式典を行っている9日午前、ポロシェンコ大統領が軍人らを前に「ウクライナが戦勝記念日をロシアのシナリオ通りに祝うことは、2度とない」と演説した。ウクライナは式典を西欧と同じ5月8日に執り行い、8、9日両日を「追悼と和解の日」とした。同国は、ロシアが対独戦の死者を2,700万人と強調したことに猛烈に反発する。これは「ソ連」の犠牲者数であり、ロシア人死者は内1,400万人。ウクライナ人死者は700～800万人であるが、これは同国の人口(4,000万人)の16～20%にあたる尋常ならざる割合であると主張した。ウクライナ議会では4月、ナチズムに加え、共産主義(ソ連)のシンボルの使用を禁止する法案が可決された。対独戦を「大祖国戦争」と呼ぶこともやめるという(東京5/18ほか)。

ウクライナ情勢を深刻に受け止めているのは、第二次世界大戦後、ソ連の影響下におかれた旧東欧諸国も同様である。スロバキアのキスカ大統領は5月8日、ソ連兵など連合国の兵士が埋葬されている墓地を訪問したが、ナチズムと共産主義を並置し、「過去の思想は憎悪をまき散らした」と発言した(日経5/9)。ポーランドでも同様に、7日深夜から8日未明にかけて第二次世界大戦開戦の地グダンスクで行われた式典で、コモロフスキ大統領が「我々はドイツとソ連の全体主義の被害者となった。大戦の終わりは、ソ連による何十年もの支配の始まりに過ぎなかった」と演説。クリミア半島のロシアへの編入について、「1939年以来の時代錯誤」と表現し、強く批判した。式典にはウクライナのポロシェンコ大統領も招待され、「侵略と編入の歴史を繰り返すな」とロシアを牽制するスピーチを行った(毎日5/9ほか)。その場には、チェコ、スロバキア、クロアチア、ブルガリア、ルーマニア、エストニア、リトアニア といった東欧・バルト諸国の大統領、首相が臨席していた。

#### おわりに

終戦30年の1975年にジスカールデスタン仏大統領が「対独勝利を祝うというのは今回で最後にする」と表明して以来、欧州の「終戦の日」にはドイツが戦争犯罪を謝罪し、旧連合国がそれを受け入れて欧州和解を演出するという安定した構図が確立されてきた(日経5/9)。ただし、記憶の風化や移民の増加という社会変化の中で、新たな課題も生じている。さらに、10年の時を経て様変わりしたロシアの戦勝記念日と、それを取り巻く各国の反応からは、戦争の犠牲者の追悼が政治の只中に置かれていることを再確認させられる。

[文責：加藤久子]